

詠

毎日歌壇

伊藤 一彦 選

軽々と飛び越えてゆく人を見てくぐれる穴を  
のそのそ探す 横浜 友常 甘酢

△評▽新年度にさうそうとハードルを飛び  
越える人は、自分は「くぐれる穴」を探す  
とどう余裕たっぷりマイペースがいい。

宝くじ当てた感じで難病を告げられたけど凹  
まぬわし 奈良 石田 水紀

△評▽告げる側と告げられる側の深い溝。  
だが作者は「凹まぬ」と負けていない。

散ってゆく桜の下で君が言う花も枝まで帰ら  
たいかな 東京 藤沢 静二

ありのまま等身大の言葉では踏み潰されてし  
まう世の中 雲南 熱田 一俊

永遠のあなたを画布にとごめて数えきれな  
い海を見にゆく 花巻 永汐 れい

タワマンにタワマンカーブとあると聞く格差社  
会がニョキニョキ生まる 杵築 緒方 翠

躓いて膝を擦りむく痛さより素通りしてゆ  
く靴見るかな 尼崎 小石 縋子

絆とか叫ばなへんとも米、醤油 貸し合ふ長  
屋にわれは言いき 東京 池崎 富夫

湖を奪い合つてくぐり鳴は春風にゆらゆら揺  
れてゆく 熊本 貴田 雄介

菜の花の咲き放題で黄金なす四万十川の大  
な中州 須崎 野中 泰佑

米川千嘉子 選

老健の父に頼まれ作りしは肩書き入りの名刺  
十枚 葛城 上島 博

△評▽自宅での生活に戻るべくリハビリ中  
の父。「肩書き」は以前の生活に戻ろうと  
する意欲の表れか。枚数もリアル。

手毬寿司のやうな桜が空を埋め花の隙間に青  
が滴る 和光 中門 和子

△評▽小さなかたまりをなして咲く桜をた  
くみに描く。上句の比喩が美しく美しい。

魔法にてパン屋や花屋に変身し非正規かなん  
て気にしなかつた 広島 堀 眞希

澄みきれぬ設計しむ鹿威し樹脂製なりと知  
りてうなづく 東京 上原 厚美

五十年前の課長のかほ浮かぶ不二家ネクタイ  
ごくりと飲めば 三鷹 関 静男

燃費良い車の増えて苦しいと副業増やす友の  
スタンド 日南 宮田 隆雄

たこ焼きをぐるぐる回ると回しゆく母の指か  
ら潮が香れり 札幌 住吉 和歌子

風やわらかな家に眠りて心臓のますます稼働  
している豊后 須崎 野中 泰佑

地ビールを喉るあなた顔の約五分の一を泡  
につづめて 枚方 久保 哲也

形状は釣り鐘型の山のようなカヌレ・ド・ポー  
稜線は甘く 奈良 島 眞澄

加藤 治郎 選

空に、嗚呼、「強い言葉」と叫べたら白い  
翼を得られるだろうか 横浜 砂月 七

△評▽この作品は読者が参加して成立する  
のだから。(強い言葉)で何と叫ぶかであ  
る。例えば「助けてくれ」というように。

また誰かと歌えることを信じてる横断歩道に  
転がる天使 名古屋 外山 雪

△評▽天使は死んだのか。陰惨な世界を暗  
示する。それでも希望をもって歌うのだ。

その時のさらつきだけを覚えてて貴方の何に  
触れていたっけ 大津 世田 夏雪

つややかな指先に触れていいですか この気持  
ちは恋 間違っても恋 横浜 荒田 絵里子

ときめきを抱くしかない 新しい本の匂いに  
きみは似ている 所沢 神田 望

良心的なアンドロイドと海を見てあなたの声  
で話してもらおう 花巻 永汐 れい

わたし自身かなしいことばあるけれどわたし  
とはまた別の言葉で 横浜 大原 香花

夢の中が土砂降りだった漆黒の出自金跳ねる  
朱盆を持って 名古屋 浅井 克宏

下駄箱は「わ四」と決めとるわしの下駄箱が  
塞がったと哀しい 川崎 船山 登

介護疲れで不眠症たる言やついにいつに決  
断の春 須崎 野中 泰佑

水原 紫苑 選

砂漠にも水路を引いた正しきで心のほとりに  
水をくたさい 東京 首羽 凜

△評▽砂漠に水路を引くという人間的な営  
みがもしも正しいのなら、心のほとりにも  
水を求められるかもしれない。

雛菊の花の細部におどろいて俯くきみの自  
我をみていた 平塚 芝澤 樹

△評▽ヒナギクの細部に打ちのめされる人  
間の自我。それは誰のものか。

さよならの、さと言いまえに息を吸う管制塔  
のよつな眼差し 京都 よだか

樹であった記憶のこのきみとゆく三日月鏡  
き春の箱庭 取手 奥山 いずみ

冬って付ければぜんぶ寂しく、お化け屋  
敷は特別だった 長岡 三月 とも

春を呼ぶ、しまはれてゐたふところの鳩を取  
り出すときの手つきで 見附 有村 桔梗

絶交を告げられた午後遠くから霊気楼のごと  
母の影 那覇 奥村 真帆

世界中の春が一度に終はることはないな  
樹きみがあれば笑へる 横浜 永永 キヌ

散るさくらばかり目で追いつくまでも天動説  
の舟に疲れて 東京 富見井 高志

木苺の歯触りがまた残って死ぬ想像をし  
ながらむむむ 名古屋 岩塚 光希

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます